

景観特性及び農地基盤条件からみた傾斜地水田保全

Conservation of Terraced Paddy Fields from the view of Landscape Characteristics and Farmland Conditions

○栗田英治* 八木洋憲**

KURITA Hideharu* YAGI Hironori**

1. はじめに

高齢化・過疎化の更なる進行にともない農業従事者の減少が続くなど、中山間地域の農地を取り巻く状況は厳しさを増している。特に平坦地と比較して、耕作条件が厳しい傾斜地に立地する水田では、今後も耕作・管理放棄が数多く生じていくことが予想されている。

一方で、傾斜地水田（棚田）は、代表的な文化的景観として評価され、景観保全や環境保全の面から耕作・管理の必要性が述べられてきた。また、各地でオーナー制度や農作業ボランティアなど非農家を交えた保全活動が展開されている。

しかしながら、棚田及び棚田景観の保全の取り組みの多くは、一部の地域を除いて、限られた個別地区での取り組みが中心であった。そのため、広い山間地を抱える市町村などにおける農地保全の取り組みとの連携は、十分な形では展開されてこなかった。

今後は、市町村等のより広範な地域において、景観保全などの視点も加味した傾斜地水田の保全の方向性を検討していくことは不可欠である。本研究では、傾斜地水田が有する景観特性及び農地の基盤条件等の評価にもとづき、今後の保全の方向性の検討を試みた。

2. 調査・研究の方法

1) 調査対象地域

調査対象地域には、新潟県十日町市松代地区（旧松代町）を選定した。当地域は東頸城丘陵の東部に位置し、標高は150～500mで、全域が丘陵・山地地域である。地区内には、数多くの水田が存在しており、その多くが傾斜地に立地している。市の観光案内などにおいても多くの棚田の撮影ポイント（視点場）が紹介されている。

地区内の多くの集落において、中山間地域等直接支払制度の集落協定の締結がなされており、また、地域のNPOなどによる棚田保全活動も展開されている。

2) 調査・研究方法

景観特性の評価については、既往研究¹⁾において棚田景観の印象との関係が明らかになっている視点場からの眺望と区画の連担性に着目した。視点場からの眺望については、地域内外の住民が通行可能な国道・県道・市道などの主要道路（幅員3m以上）を、傾斜地水田の可視・不可視を判断する視点場に設定した。その際、視野角を人が無理なく俯瞰することができるかとされている俯角 $2^{\circ}\sim 30^{\circ}$ ²⁾を視野の範囲として設定し、その範囲に含まれる田面区画を抽出した。傾斜度については、国土数値情報の50mメッシュ標高データを

* (独)農業・食品産業技術総合研究機構 National Agriculture and Food Research Organization

** 東京大学 University of Tokyo

キーワード：中山間地域、棚田、景観保全

用いて算出し、各種データの解析には ESRI 社の ArcGIS 10.0 を用いた。

景観特性により区分された傾斜地水田（図 1）について、農地基盤条件（区画面積、圃場整備状況）、現況の管理状況（管理する農家の水田面積規模、直接支払の対象農地）等から評価をおこない、今後の保全・管理に向けた課題と方向性について考察した。

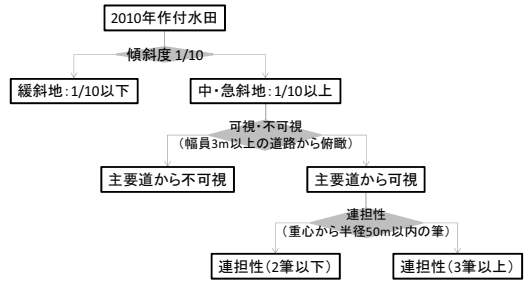


図 1 傾斜地水田の区分の流れ

Fig.1 Flow of terraced paddy fields classification

3. 結果と考察

図 2 は、図 1 の手順で区分した傾斜地水田について、主要道から可視かつ連担した傾斜地水田（右下の区分）の分布を示したものである。市等が発行する地図などにおいて紹介されている棚田景観の視点場以外にも、同様の景観特性を有する水田が多く分布していることが分かる。農地基盤条件との関係では、対象地域の西部を中心に過去に県営・団体営など比較的規模の大きな圃場整備が実施された水田が該当していることが明らかになった。こうした水田の多くは、認定農業者や 3ha 以上の経営耕地（水田）面積を有する規模の大きな農家が担っており、景観保全と農家経営の両立を検討していくことが可能な水田と考える。一方で、未整備かつ小規模（3a 以下）な水田も北部・東部を中心に数多く該当している。これらの農地は、作業の効率性などの面から規模拡大を図ってきた農家が今後管理等を担っていくことは困難と考えられ、新たな保全・管理の枠組みの検討が必要である。現況の管理状況との関係では、該当する水田の約 6 割（面積比では 5 割強）が経営耕地（水田）面積 1ha 未満の農家が管理を担っている。当該地区内の農家及び J A 担当者へのヒアリングから、小規模の農家の多くは、農地の貸借等は行わず、所有する農地を自ら耕作する農家であることが分かっており、広く傾斜地水田の保全を図っていくためには、こうした農家の耕作・管理の継続を支援することに特化した取り組みも必要と考える。

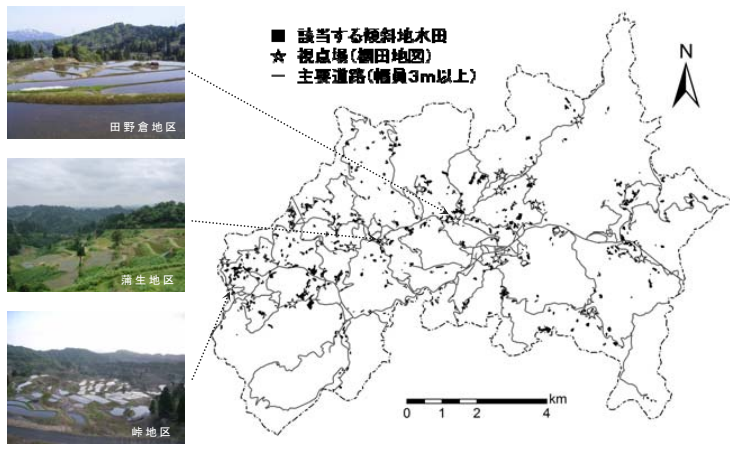


図 2 主要道から可視の連担した傾斜地水田（1/10 以上）

Fig.2 Distribution of visible terraced paddy fields from main roads

【参考文献】

- 1) 栗田英治・松森聖治・山本徳司 (2009): 地域住民及び地域外住民による棚田景観の認知・評価構造, 農村計画学会誌, 27 (論文特集号), 257-262.
- 2) 樋口忠彦 (1975): 『景観の構造』. 技報堂出版, 東京.